第六十三回 神宮式年遷宮

「お伊勢さん」二十年に一度の大祭

令和七年五月二日 山口祭

午前八時　皇大神宮
正　午　豊受大神宮

式年遷宮の最初のおまつり。

遷宮の御用材の伐採を始めるにあたって、御用材を伐り出す「御杣山」の山口に坐す神をまつり作業の安全を祈ります。

今回の遷宮では、御杣山は木曽地方と天皇陛下にお定めいただきましたが古くは御杣山は皇大神宮（内宮）は神路山、豊受大神宮（外宮）は高倉山であったことから、古例のままにそれぞれの山口の祭場でおまつりが行われます。

五色の幣を掲げ祭場へ

饗膳（きょうぜん）

山口祭祭場

令和七年五月二日 木本祭

皇大神宮並びに豊受大神宮の御床下の中央に奉建する心御柱の御用材を伐り出すおまつり。

古来秘儀とされ、両宮とも夜間に奉仕員のみで密やかにとり行われます。

古例により童男・童女が奉仕し、伐り出された御木は両宮の域内で清浄に奉安されます。

令和七年六月三日 御杣始祭

午前十時　長野県木曽郡上松町

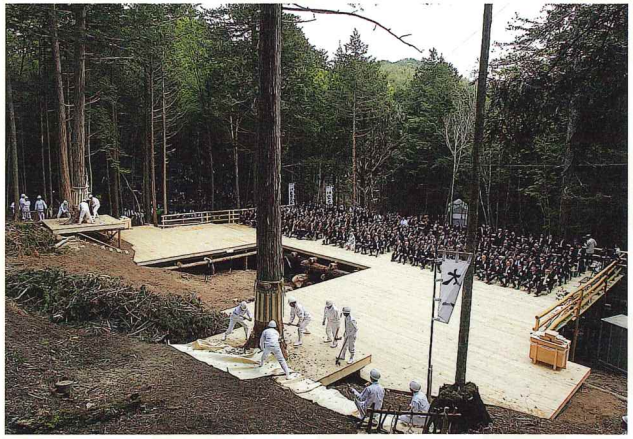
第六十三回神宮式年遷宮の御用材を伐り出す「御杣山」は長野・岐阜両県にまたがる木曽谷国有林及び裏木曽国有林と天皇陛下にお定めいただきました。

その御杣山に坐す神をまつり、御神体を納める御樋代木を伐り出すおまつりが御杣始祭です。

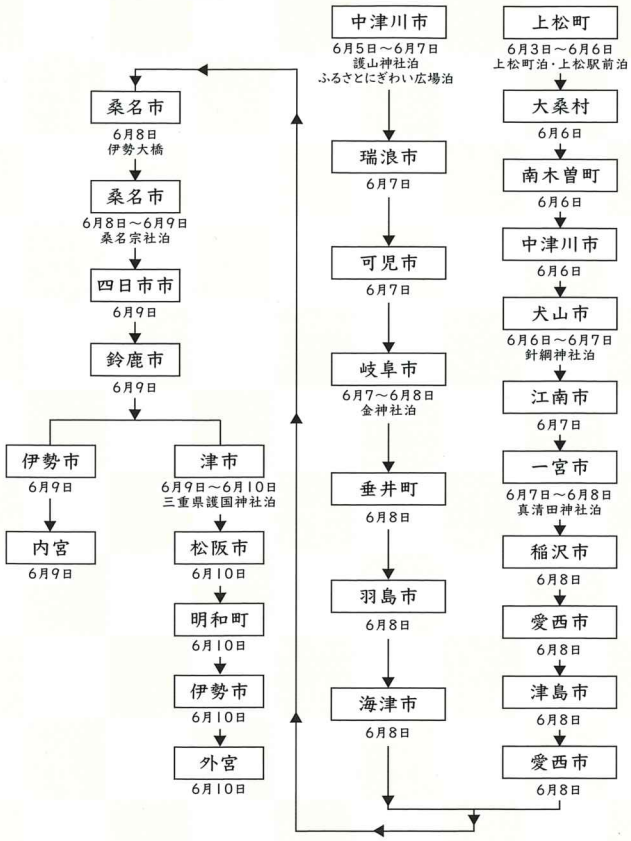
皇大神宮、豊受大神宮それぞれの御木の前で御用材伐り出しの安全と遷宮の完遂を祈って伐採を行います。

斧を用いた「三ツ緒伐り」という古式によって伐採された御樋代木は「御神木」として沿道での盛大な奉迎送を受けながら伊勢まで運ばれます。

六月五日には裏木曽においても「裏木曽御用材伐採式」が行われ、御杣始祭と同様に御樋代木が伐り出されます。



御神木奉搬行程



御樋代木奉曳式

川曳

陸曳

御神木は、長野、岐阜、愛知、三重の各県を通って、盛んな歓迎のなか多くの人々の手によって伊勢へと陸送されます。ご宿泊やお立ち寄り先ではおまつりが行われ、にぎやかに奉祝行事などが繰り広げられます。

伊勢へ運ばれた御神木は内宮へは川曳で、外宮へは陸曳で曳き込まれ、神職の出迎えを受けて両宮の五丈殿前に安置されお祓いが行われます。

神宮

「お伊勢さん」「伊勢神宮」の呼び名で親しまれている神宮は、皇室の祖先神「天照大御神」をおまつりする皇大神宮（内宮）を中心に一二五のお社から成りたっています。

ご鎮座以来悠久二千年、皇室・国家の繁栄と国民の幸せを祈って、年間延べ一、五〇〇回に及ぶおまつりが繰り返されてきました。

その中でも最も大事なおまつりは、毎年十月に行われる「神嘗祭」です。

私たちの生きる糧でもある、その年の清らかな新穀を大御神にたてまつり、限りない御神恩に感謝を捧げる神嘗祭は、私たちのくらしの平安と活力の証しであり、栄えゆく豊かなくらしを約束する、喜びと希望に満ちたおまつりです。

お供えの神饌をはじめとして、清浄を尊び行われる神嘗祭を始めとする神宮のおまつり。中でも、全てにわたって清らかに装いを整えて行われる、二十年に一度のおまつり、それが「式年遷宮」です。

式年遷宮

二十年に一度、宮処（御敷地）を改め、古例のままに御社殿や神宝をはじめ、一切を新たにし大御神の新殿へのお遷り（遷御）を仰ぐ式年遷宮。

天武天皇のご発意により持統天皇の御代に初めて執り行われました。以来、我が国にとって最も大事なおまつりとして重んじられ、千三百年という、世界でも例を見ない、かけがえのない歴史と伝統を有しています。

全てを清らかにあらため、神々の社と共に、国も人も共に若返る…。

「式年遷宮」は、主旨、構成、規模において壮観類を見ない、晴れやかな民族の一大祭典です。

更に、二十年に一度、御社殿や神宝類の全てを古式のままに一新する式年遷宮は、我が国の伝統文化の起源を伝え、技術の保存継承にも大きな役割を果たしています。

遷宮のおまつり

山口祭に始まり、八年間にわたって約三十に及ぶ祭典・行事が行われ、主要な祭典については、日時等を天皇陛下にお定めいただきます。式年遷宮のおまつりは下記の一覧表（一部）のように様々ありますが、令和十五年には、第六十三回式年遷宮の最高潮「遷御」の儀を迎えます。

遷宮の主な祭典と行事（実施年は前回遷宮の例による）

山口祭（令和七年）
御用材を伐り出すにあたり山の神に安全を祈ります。

御杣始祭（令和七年）
御神体を納める「御樋代」の御料材を古作法により伐り出します。

御船代祭（令和七年）
「御樋代」を納める船形の「御船代」の御料材を伐採するおまつり。

木造始祭（令和八年）
ご造営工事にあたり、御用材に墨を打ち、斧を入れて安全を祈ります。

御木曳行事（令和八・九年）
地元伊勢の住民が揃いの法被姿で御用材を両宮に曳き入れる盛大な行事。
全国の「特別神領民」も多数参加して、伊勢は勇敢な掛け声と木遣音頭に包まれます。

鎮地祭（令和十年）
新殿を建てる御敷地での最初のおまつり。「地鎮祭」に相当します。

宇治橋渡始式（令和十一年）
神宮の象徴となっている「宇治橋」も新しくなり、「渡女」や三世代揃いの夫婦を先頭に盛大に渡り始めを行います。

立柱祭（令和十四年）
新殿の建築にあたり、御柱の木口を木槌で打ち安泰を祈ります。

上棟祭（令和十四年）
正殿の棟上げの華やかなおまつり。棟木に連なる綱を引き、「千歳棟、万歳棟、曳々億棟」のかけ声も高く棟木を木槌で打ち固めます。

御白石持行事（令和十五年）
御木曳行事と同様、地元伊勢の住民や全国の特別神領民が「御白石」を曳き、完成した真新しい御正殿の御敷地に奉納します。

杵築祭（令和十五年）
新殿の竣功にあたり御敷地を突き固めるおまつり。古歌を唱え、白杖で御柱の根本を突きながら新殿のまわりを巡ります。

後鎮祭（令和十五年）
新殿の竣功を感謝し、その平安を祈ります。

川原大祓（令和十五年）
「遷御」の儀に先だって、御装束神宝や神宮祭主以下の奉仕員を「川原祓所」で祓い清めます。

遷御（令和十五年）
式年遷宮の中核をなすおまつり。午後八時、全ての灯りが消された浄闇の中、大御神は本殿を出御、新殿へ入御されます。百名を越える奉仕員は御神宝等を手に付き従い、参道沿いの多くの奉拝者が見守る中、荘厳な古代絵巻が繰り広げられます。

奉幣（令和十五年）
遷御の翌日、天皇陛下から奉られる幣帛を新殿の大御神に奉納します。

御神楽（令和十五年）
宮中の楽師が神宮に遣わされ、御垣内の四丈殿で庭燎の灯りがゆれる中、深夜まで厳かに御神楽を奏でます。